「したきりすずめのクリスマス」の劇について

——仙台黒松教会の例

平間（ひらま） 節子（せつこ）（仙台黒松教会日曜学校教師）

仙台黒松教会では、開設以来子供達に恵まれ、クリスマスには聖誕劇等をしていましたが、ここ20年位は聖誕劇だけではなく、「靴屋のマルチン」や「鳴らない鐘」や「きよしこの夜の生まれたわけ」等「クリスマス劇集」にある脚本を見て、その時々の子供のメンバーに合わせて脚本を創ってきました。今回はその中で三浦綾子さんの「したきりすずめのクリスマス」（文・三浦綾子、 絵・みなみ　ななみ、英文・アーデン・ルイス、発行：ホームスクーリング・ビジョン）を紹介させていただきます。「したきりすずめのクリスマス」は実は私の古くからの友人である福岡城南教会の谷村さんから「クリスマスにペープサートにしてやってみたらとっても良かった」というお話を伺って早速絵本を買って、子供達の実態に合わせた脚本にしてみました。おじいさんとおばあさん、イエス様は教師が、すずめのチイ子は小学生が、すずめの教会学校の子供達は幼稚科の子供達が演じました。人殺し役はまるで似つかわしくない高校生が演じ、ナレーターは中学生が担当しました。大道具は大きなつづら（ダンボールを風呂敷で包んだ物）と小さなつづら（お菓子の箱を風呂敷で包んだ物）おばけ３体（三つ目小僧、口裂け女、やきもち）と天狗は縦に２枚つなぎ合わせたカレンダーの裏にクレパスで描きました。「おじいさんとおばあさんの家」と「すずめのお宿」のバック絵はダンボールを開いて平らにした物にクレパスで描きました。（模造紙に描くと貼ったり、外したりが大変ですがダンボールに描いて椅子の上に立てかけるだけだと出し入れが簡単です。）衣装はおじいさんとおばあさんは昔風の綿入れに手ぬぐいを被り、イエス様は天使風の白い衣装、すずめ達は茶色っぽい服にすずめのお面を被りました。劇にして演じてみると、善人だと思われていたおじいさんが実は一番の罪人だったという意外性があったり、「大きなつづら」の中からいろいろなおばけが出てきたりといろいろな見せ場もあり、「聖誕劇」とはまた違った面白さ、三浦綾子さんならではの信仰理解の深さがあり、なかなか好評でした。仙台黒松教会では現在子供たちの数は多いのですが、小学生以下の幼児が多いので、ここしばらくは大人も出られる聖誕劇を演じることになりそうです。「したきりすずめのクリスマス」はとても良い作品なのでペープサートでも劇でも演じられると思いますので、是非お試しください。

クリスマス劇脚本 「したきりすずめのクリスマス」

原作:三浦　綾子
脚本:平間　節子

登場人物

おじいさん	こすずめ達
おばあさん	男の子
チイ子	男の人
イエス様	ナレーター

〔第１場〕　おじいさんとおばあさんの家

ナレーター:「弓矢を　持っても　かかしは　かかし。当たらぬ　弓矢は　こわくない。」
すずめの　チイ子は　今日も　きれいな声で　歌って　います。

チイ子:　「あら。おじいさん。おはようございます。」

おじいさん:「おはよう、おはよう。いつ聞いても　いい声じゃ。お前の　かわいい声を聞くと　命が
のびるような　気がするわい。」

チイ子:　「ありがとう、おじいさん」

おじいさん:「チイ子や、おじいさんはのう、これから　山へしばかりに　行ってきますぞ。」

チイ子:　「行ってらっしゃい。おじいさん。でも、おじいさんが　いないと　なんだか
さびしいわ、わたし。」

おじいさん:「チイ子や、おばあさんに　かわいがられるよう、おとなしくしているんだよ。」

チイ子:　「はい、わかりました。はやく、かえってね。おじいさん。」

おじいさん:「よしよし。それでは　行って　くるでな。」

（チイ子、行ったり来たりして歌う。）

チイ子:　「あんまり　歌ったら　おなかが　すいたぁ。おや？のりが　あるわ、おいしそう。
食べたいなあ。少しぐらいなら　食べても　わからないわ、きっと。
わ、おいしいわ。もう少し、ほんとに、おいしいわ。もう少しだけ。
あら！ぜんぶ　食べちゃった。おばあさんに　しかられるぅ。どうしよう。」

おばあさん:「何と良い　お天気だろう。張り物を　するには、もってこいのお天気だこと。
あら！のりがない！だれの　いたずらだ！　チイ子、お前だね！のりを食べたのは。」

チイ子:　「ごめんなさい。ごめんなさい。」

おばあさん:「いやいや、今日はもう　かんべん　できないよ。にくいチイ子め、その舌を切ってやる！」

チイ子:　「ごめんなさい。ごめんなさい。おばあさん、ゆるしてください。」

おばあさん:「待てぇ、待てぇ。舌を切らねば　したきりすずめのお話では　なくなるわ。」

（逃げるチイ子をおばあさんが追いかける）

ナレーター:こうして　かわいそうに　チイ子は舌を　切られて　しまいました。
その後　チイ子は行方知れずに　なりました。

〔第２場〕　すずめのお宿

おじいさん:「あれから　ふたつき。探しても、すずめの　お宿は　わからない。おう。雪がふる。
お宿はどこじゃ　すずめさん。お宿はどこじゃ　すずめさん。」

（歩いているうちに、すずめのお宿の門のところに来る。）

チイ子:　「おじいさん、おまちして　おりました。」
おじいさん:「おうおう　チイ子、元気じゃったか？よかった！よかった！」
チイ子:　「おじいさん、しんぱいしてくれて　ありがとう。きょうは　ちょうど　すずめの
クリスマスの　日です。」
おじいさん:「クリスマス？はて、どこかで　聞いたことが　あるわいのう。」
チイ子:　「はい、イエスさまの　おたんじょう日　なのです。」
おじいさん:「イエスさま？まあ、なんであっても　お祝いごとは　うれしいものじゃ。」

司会者（ナレーター）:「次は、すずめの　教会学校の生徒が　聖句の暗唱を　します。」
すずめA:　「なやみの日に　わたしをよべ。」
すずめB:　「神は　そのひとり子を　たまわったほどに、この世を　あいしてくださった。」
すずめC:　「すべて　重荷を負うて　苦労している者は、わたしのところに　来なさい。」
すずめD:　「もとめなさい、そうすれば　与えられるだろう。」
（はく手が　起こる。）
おじいさん:「よく　むずかしい言葉を　覚えたものじゃ、えらい。えらい。」
司会者（ナレーター）:「次はさんび歌１０９番です。歌は　教会の聖歌隊のみなさんです。」
おじいさん:「さて、私は　そろそろ　おいとまを　しましょうかい。」
チイ子:　「まあ、おじいさん、まだ　よいでは　ありませんか。」
おじいさん:「いや、おばあさんも　ひとりで　さびしいだろうし。」
チイ子:　「おじいさん、きょうは　よく　いらっしゃいました。おみやげに、かるい　つづらと、
おもい　つぢらの　どちらが　いいでしょうか？」
おじいさん:「わしは　年寄りじゃで、かるい　つづらを　いただきましょう。」
（チイ子、かるい　つづらを　あげる。）
おじいさん:「ありがと。ありがと。では　チイ子、元気で　いるんだよ。」
チイ子:　「おじいさん、どうかまた　来てくださいね。」
すずめたち:「また　来て　くださいね。」
おじいさん:「みなさん、ありがとう。とても　楽しい　クリスマスでしたぞ。本当にありがとう、
さようなら。」

〔第３場〕　おじいさんとおばあさんの家
おじいさん:「ただいま、おばあさんや。すずめの　お宿は　クリスマスでのう、チイ子も
たいそう　元気じゃったよ。」
おばあさん:「そんな話より　もらって来た　おみやげを　早く　開けて　見せて下さいよ、
おじいさん。早く、早く。」
おじいさん:「よし、よし。ところでのう、おばあさんや、軽いつづらと　重いつづらと
どちらがよいかと　言うのでな、わしは年寄りじゃで、軽いのを　もらって　きたんだよ。」
おばあさん:「まあ何と甲斐性のないおじいさんだこと。だからいつも　貧乏しとるんじゃ。
重いつづらが　何じゃ。男のくせに！この意気地なし！」
（おじいさんは、聞こえぬ顔で　つづらを　開けてみる。）
おじいさん:「おや？これは本じゃ。見たことのない本じゃ。」
おばあさん:「本？まあ！本だけ？何となさけない、ああ、どこかの国の　大臣の嫁に　なればよかった。」

おじいさん:「うむ、なになに、聖書と　書いてある。聖書とは、おばあさん、一体　何じゃろうのう。」
おばあさん:「ばかばかしい。こんな本など　トイレットペーパーにも　なりはしない。　そうだ、
私が行って　その重いつづらを　もらってこよう。」
おじいさん:「そんな----------。おばあさん、はずかしいことを---------。」
おばあさん:「何が　はずかしいもんか。えらい人は、みな自分から　催促して　金を出させて
いるじゃないか。善はいそげじゃ、では、行ってきますよ。おじいさん。」

〔第４場〕　すずめのお宿

おばあさん:「すずめ、すずめ、すずめのお宿は　どこじゃいなあ。」
チイ子:　「まあ　おばあさん、よくおいで　くださいました。どうぞ、お入りください。」
おばあさん:「いや、いや、わしは　ただ　つづらを　もらいに　来ただけじゃ。さあ　いっこくも
早く　つづらを　お出し。」
チイ子:　「おもいつづらと　かるいつづらが　ございます。どちらがよろしいでしょうか。」
おばあさん:「それは　聞くまでもないことじゃ。重いつづらにきまっているわ。したきり
すずめの　おばあさんが　軽いつづらを　もらったなどとは　聞いたことが
ないわいなあ。」
チイ子:　「それではどうぞ。おばあさん」（と　おもいつづらを　わたす。）
おばあさん:「はい。それじゃ、さようなら。」
チイ子:　「気をつけて　お帰りください、おばあさん。」
（おばあさんは、ふりむきもせず、重いつずらを　背負って　帰っていく。）

〔第５場〕　雪　野　原

おばあさん:「うんとこしょ、どっこいしょ。何のこれしき、うんとこしょ、どっこいしょ。
重けりゃ重いほど　楽しみも　大きいというものじゃ。さあてと、ここらで
ちょっと　ひと休みじゃ。」（と言って、つづらを　おろし、あせを　ふく。）
それにしても　何と　重いつづらだろう。きっと　金、銀、さんごにダイヤモンド、
おおばん、こばんが　ザックザック。ああ、家に　つくまで　待ちきれんわい。
どれ、ここらで　ちょっと　のぞいて　見ましょうかい。」
（おばあさんが　つづらを　開けると　中から　おばけが　出て来る。）
おばあさん:「ああ、お、お、おたすけー。だれか来てえー。た、たすけてー！たすけて　くだされえ。」
イエスさま:「おばあさん、おばあさん、一体　どうしたのです。」
おばあさん:「ああ、どなたか　ぞんじませんが、おたすけください。お化けが　おばけが。」
イエスさま:「おばあさん、よく見て　ごらんなさい。あれはね、おばけでは　ありません。」
おばあさん:「え！？おばけでは　ない？そんなことが　あるもんか？」
イエスさま:「あれは　あなたの　心の　すがたです。」
おばあさん:「何だって？あれが　私の心だって？私の心が　あんな　おそろしい　姿をしていると
言うのかね。冗談じゃない。」
イエスさま:「そうです。冗談じゃ　ありません。ほら、この三つ目小僧を　ごらんなさい。これは
よく深い　心の姿なのです。目は二つでいいのに　欲ばって三つも　あるでしょう。
あなたは　よく深く　ありませんか？」
おばあさん:「欲は---------それほど　深くはない。人なみじゃ、いや　そう言えば　深い

かもしれない。なにしろ、重いつづらを もらってきたんだからねえ。」
イエスさま:「つぎの口さけ女は、意地悪の姿なのです。意地悪をした覚えはありませんか？
おばあさん:「それは---------はい、あります。私は、すずめの舌を 切りました。」
イエスさま:「つぎは、やきもちの 心の姿です。」
おばあさん:「わかりました。申し訳 ありません。私は、本当に 悪い女です。やきもちやきで、おこりんぼうです。だから、チイ子の舌も切ったのです。何とむごいことをしたのでしょう。 ああ、私がどんなに悪い おそろしい 心の人間か、やっと気がつきました。何とみにくい私でしょう。何とおそろしい私でしょう。どうぞ、おゆるしくださいな。今から 心を変えまする。あなたに従います。」
イエスさま:「いいえ、あなただけが 罪深いのでは ないのです。大人も子供も みな同じです。自分だけがよければよい。自分の家族さえ 幸せならよい。人より 少しでも 良い学校に入りたい。出世をしたい。お金がほしい。自分より優秀な人間が憎い。重いつづらと軽いつづらを 出されたら、だれも重いつづらを もらいたいと思う人ばかりです。ねえ、みんな、そうではありませんか？」
おばあさん:「ところで あなたは どなたなのですか？あなたと お話していると、私の心がなぜか不思議に 素直になってくるのです。」
イエスさま:「私は イエス･キリストです。」
おばあさん:「イエス･キリスト？聞いたことのない お名前ですが、ご商売は？」
イエスさま:「商売ですか？そうですねえ、私の仕事は 人を罪の重荷から 救う事です。」
おばあさん:「え､人の罪を救うのが仕事ですって。では私のあのおそろしい罪も 背負ってくれますか？」
イエスさま:「背負ってあげますとも。すべて 重荷を負っている者は 私のもとに来なさい。休ませてあげよう。罪を悔い改める人は みな救われるのです。」
おばあさん:「では 私の罪の入った 重いつづらは？」
イエスさま:「もちろん、私が あなたの代わりに 背負ってあげましょう。」
おばあさん:「えーっ！？あなたがですか？」
イエスさま:「そうです。私は 人々の罪を背負うために この世に生まれました。」
おばあさん:「まあ、何とありがたい お方でしょう。もう一度お名前を 教えて下さい。」
イエスさま:「イエス･キリスト、神の子です。」
おばあさん:「え？神の子ですって！どうりで 神々しい お優しいお方だと 思いました。でも、神様のお子様と お話をしたりして ばちがあたります。どうぞ、私の罪をおゆるし下さい。イエスさま。」
イエスさま:「おばあさん、あなたの罪は ゆるされました。あなたの つづらを 私が背負いましょう。」
おばあさん:「まあ、何ともったいない。それでは 私の罪を そっくりイエスさまに------.重いつづらで ございますよ。」（イエスさま、おばあさんのつづらを負う。）
男の子: 「イエスさま、ぼくの罪も ゆるしてください。お友達に いじわるしたり、わがままを 言ったりしました。」
イエスさま:「よい子よ、ゆるしてあげます。安心して行きなさい。」
男の子: 「ありがとう、イエスさま。」
男の人: 「イエスさま、おゆるしください。おれは たった今、人を殺してきました。こんな 極悪非道の者でも ゆるしてくださるのですか？」

イエスさま:「その心が　大切です。悔い改めた人は、みな　私の友達です。」
男の人:　「友達？ああ、何と　もったいないことでしょう。では、すぐに　警察に　行って自首します。」
（そこへ、おじいさんが登場する。）

おじいさん:「イエスさまとは　あなたでしたか？私は今日、すずめのお宿で　あなたさまのお誕生日を　お祝いしました。」
イエスさま:「それは　それは　ありがとう。」
おじいさん:「なんのなんの。ところで　イエスさま、私は、このおばあさんのように欲深くもなく、意地悪でもないことを　感謝いたします。この　人殺しのような者でないことを　感謝いたします。私は　何ひとつ　罪を　おかさず、正しく生きてきましたでな。」
イエスさま:「そうですか、おじいさん。しかし、世界中に　まったく正しい者は　ただの一人も　おりません。」
おじいさん:「え？正しい者は　一人もいない？」
イエスさま:「そうです。一人も　おりません。」
おじいさん:「じゃが、ここに　私がおるじゃありませんか。舌きりすずめの　おじいさんは、欲のない優しい人間だと　昔から言われておりますぞ。この私に　罪など　あるはずがないではありませんか？」
イエスさま:「そうでしょうかねえ。」
おじいさん:「そうですとも！わしのことを　悪く言う人は　だれもおりませんぞ。誰にも優しく親切だと　言う人ばかりでしてな。」
イエスさま:「そうですか？では、後ろを　見てごらんなさい。」
おじいさん:「ひえ！これは---------」（後ろに　天狗の　おばけが　現れる。）
イエスさま:「これが　あなたの　本当の姿です。傲慢の姿です。私は、あなたの言葉を聞いて悲しく思います。自分には　罪がないと思っているほど　大きな罪はないのですよ。これは　神様の一番きらいな　重い重い罪ですよ。おばあさんよりもむしろ罪が深いと　言えるでしょう。」
おじいさん:「えつ、おばあさんより、この私のほうが　罪深いですと！？そんな無茶な。」
イエスさま:「いいえ、無茶では　ありません。自分の罪が分からねば、悔い改めることができません。罪は　そのまま残るのです。」
おじいさん:「なるほど　のう。分かりました。今、目がさめました。今の今まで、わしは自分を正しいと思い、長年つれそった　おばあさんを　ばかにしてきました。
罪があるのを　知らないで、自分を正しいと　思っていた。あーはずかしや、はずかしや。どうぞ　おゆるしください。今から　あなたに　従います。」
イエスさま:「よく　分かってくれましたね。おじいさん、さあ、今こそ　あなたの罪はゆるされました。」
おじいさん:「あ、ありがとうございます。」（天狗の　おばけも　消える。）
（イエスさまが　重いつづらを　背負って　帰っていく。）
おばあさん:「まあ、あの重たそうなこと。」
おじいさん:「申し訳ない。わしの罪を　背負わせて。」

おばあさん:「私たちは、肩が軽くなって--------申し訳ないねえ。」
男の子:　「おや！？あれは　何だろう？」
男の人:　「あの方だ！イエスさまが　十字架に　かかられた。」
おじいさん:「これは　一体　どうしたことだ！」
おばあさん:「どうして、神の子が　十字架に　かかられるのじゃ。」
ナレーター:「それは、私たちの　罪のためです。本当は　世界中の人々が　自分の罪のために十字架にかかるはずでした。でも、イエスさまが、代わって十字架にかかってくださったのです。本当に　ありがたいことです。今日は　そのイエスさまがお生まれになった　クリスマスなのです。イエスさまは、私達を　救うためにこの世に来られたのです。さあ、悔い改めたおじいさん、おばあさんと共に、神のみ前に祈りましょう。クリスマスおめでとうございます。　みんなでキリストの　お誕生を　お祝いして　歌いましょう。」
（出演者みんなで「きよし　この夜」を歌う。）

大道具:バック絵「おじいさんとおばあさんの家」
「すずめのお宿」の入り口
衣装
小道具:のりの皿、
小さなつづら（中に聖書）
大きなつづら（三つ目小僧、焼餅、口裂け女のおばけ）
天狗の絵
チイ子とすずめのお面